

## 日本キリスト教会大阪北教会

2016年11月27日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

### 聖書 ルカによる1章26節～38節

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28 天使は彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わる事がない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのにもう六か月になっている。37 神にできないことは何一つない。」38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。」そこで天使は去って行った。

説教「喜びなさい。神があなたと共におられます。」

◆今日からアドベント、待降節であります。今年は12月25日が最後の日曜日で、クリスマス礼拝の日であります。従って、新年1月1日の元旦が日曜日になります。毎年アドベントに入ると、今司会者によって読まれました聖書の箇所を読んでいます。ここに、「六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた」とあります。「六か月目」というのは、それこそみ使いがザカリヤ、エリザベト夫妻に現れて、受胎を告知してから「六か月目」ということです。ザカリヤはエルサレムの神殿に仕える祭司です。マリアの遠縁にあたります。この夫婦は既に老いており、子供がありませんでしたが、神様によってバプテスマのヨハネの両親になった人たちであります。その受胎告知から六か月目に、天使ガブリエルがナザレのマリアに遣わされたということでもあります。

◆わたしたちは天使と言いますと、聖書に出てくる天使を思います。「天使のような人」と形容される純な人は、世の中におられますね。けれども皆さんどうですか。本当の天使に会ったことがあるでしょうか。マリアは会っているのですね。そして神様のみ言葉を聞いています。お告げを受けているのですね。マリアはまだ十代後半の乙女であります。そのマリアに御使いが現れたのです。マリアは普通の娘さんです。ヨセフの「許嫁」でした。「許嫁」というのは婚約者とは違いますね。婚約者とは、適齢期になった二人の男女が出会い、結婚を誓って、婚約者になります。それに対し「許嫁」というのは、親同士が息子、娘をやがて夫婦になるものとして、適齢期になったら結婚する。そういう間柄の者を言います。

マリアはヨセフの許嫁であります。そんなマリアに天使が現れたのです。ですからマリアは普通の人です。普通の人に天使が現れて会話しているわけですね。

◆プロテスタントのわたしたちにはそういう経験はあまりないのではないのでしょうか。わたしたちはマリアから遠い存在だということなのかもしれません。わたしは実は「天使のような人」ではなくて、「天使」にされたことがあります。もう20数年前になります。ブラジルの教会に招かれたことがありました。ブラジルのプロテスタントの教会です。私たちが行った時には、その教会はブラジルだけで1万個近い教会がありました。思いがけない出会いを通して、招かれて行ったのですが、私と孝子さんは「天使」でした。天使を迎える扱いを見ていたのです。それでブラジル12日間滞在しまして、14回礼拝を守りました。そしてわたしたちは天使の扱いを受けました。サンパウロの信徒さん、ジェリバウドさん・リーバさん御夫妻の家に数日ホームステイさせて頂きました。2～3日すると、今度は、「神様からの御言葉を預かりましたので、持ってまいりました」と、真夜中に預言者の来訪がありました。その御言葉は、日本からの来訪した「天使」のもてなしの労苦を労う言葉でした。そして、それを語ると、預言者はすぐに立ち去りました。

◆このブラジルの教会の信徒の生活の特徴は、「神様の御言葉に従う」ということです。彼らは何をするのも神様の御言葉、御告げに聞き従って行動するのです。それを彼らは神様のみ告げを聞いてそれに従って生活する。そういう教会です。それは、「ヘヴェラソン」と言います。南米の国は一般にスペイン語ですが、ブラジルはポルトガル語です。そのポルトガル語で神様の「御告げ」のことを「ヘヴェラソン」と言います。これは英語のレヴェレーション＝「啓示」に当たる言葉です。神様の「お示し」です。日常茶飯事が事ごとに「ヘヴェラソン」に従って営まれるのです。特に、大事なことに關しては、教会に行き、祈り、「ヘヴェラソン」を求めます。ジェリバウドさん・リーバさんは、私達を迎えるに際して、教会で示された御言葉、「ヘヴェラソン」は、創世記18章1～15節でした。アブラハムへの「イサクの誕生の予告」の箇所です。アブラハムは通りすがりの3人の旅人をもてなすのですが、その3人は「天使」だったのです。天使らは、イサクの誕生を予告しますが、年老いたアブラハムも妻サラもそれを笑います。その時、神様は天使を通して言われます。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあるのか」と。この「ヘヴェラソン」を受けて、ジェリバウドさん・リーバさんは、わたしと孝子さんを「天使」として迎えて下さったのです。

◆そんなこともありました。今日の聖書の箇所では、マリアが、ガブリエルから神様の御告げを聞くわけですが、28節以下にこうあります。「天使は彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」これもよく申しますけれども、旧約聖書には文章表現法で「平行法」というのがあります。前にあることを言いました。それを次の行では違う言葉で、前の言葉の意味付けをする。するとまた3行目で別の言葉で同じ内容のことを言い替える。こういう表現法を「平行法」と言います。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられます。」「おめでとう」というのは、直訳すれば、「喜びなさい」です。なぜなら、「あなたは神様の恵みに生かされているからです。」「ですから、よろこびなさい」と。み使いは「主があなたと共におられます」と言い換えます。それが恵みなのです。神

様は、その根源において恵み深い御方であります。そして神様はその折々に必要なものを備えてくださいます。与えてくださいます。癒してくださいます。それは恵みの数々なのですね。けれども、「恵み」とは、根本的には、神様が、あなたと、いつも、どんな時にも、共におられるということなのです。

◆それでわたしたちは、「主があなたと共におられる」と言われると、神様が常に横におられて、伴っていて下さるイメージを持つかかもしれません、

今日の場合は、横じゃないのですね。マリアの中に、マリアの胎に宿られるのです。神様は、イエス様において、「マリアの胎に宿られるのです」。先週までわたしたちは、ヨハネによる福音書を読んできました。三位一体なる、父・御子・御霊なる神様は、わたしの中に生きておられる神様だということ为先週、申しました。けれども、この恵みの感覚は、わたしたちには、実感的にはよくわからないではないのでしょうか。先ほどの司会者のお祈りに、「病む者、看病する者を慰めてください。」こういうお祈りがありました。本当にそう思いますね。以前は、よく「病む者を、神様どうか癒してください」と、直截に祈る方が多かったですね。ところが、ある時点から、癒されない経験の方が多くなってくると、祈るにも、逃げが出て来ます。本当は治してほしい。けれども、癒しの奇跡は、ざらには起こらない。そこで、「慰めてください」と、祈りがだんだん後退してしまう。

◆今日の箇所では、御使いガブリエルは言います。37節「神にできないことは何一つない」と。こういうふうに天使は言っているのですね。ところがわたしたちは、慰めてくださるけれども、その慰めは必ず癒して下さることとは違う。そして癒して下さらないこともある。「癒してください」と、ストレートに祈ることが少なくなっています。けれども、それでいいのでしょうか。本心は癒してほしいのです。ですから本心ではないでしょう。そして、できないことは何一つない神様はことごとく癒して下さるのであります。それで、「おめでとう、恵まれたお方、主があなたと共におられる」と言われたマリアは戸惑いを感じ、御使いが、何を言っているのかわからない。

◆すると天使は言います。「マリア恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることはない。」マリアは天使に言った。どうしてそのようなことがありえましょう。わたしは夫を知りませんのに。天使は答えた。聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから生まれた子は聖なる者、神の子と呼ばれる。…マリアは言った。わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。そこで、天使は去って行った。」大阪で、マリア像が一番近くで見られるのは、玉造にあるカトリックのマリア大聖堂です。大阪女学院の北側にあります。その御堂入口の上部左右に大きな高山右近像と細川ガラシャ夫人像が掲げてあります。そして正面上部には、尚一層大きなマリア像が掲げられています。

◆今日の箇所におけるマリアは、あり得ない奇跡を信じたのです。人間的感覚ではそんなことはあり得ないけれども、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」と言われ、「神にできないことは何一つない」と言われた時、マリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成り

ますように」と、神の御使いの前にひれ伏しております。これが信仰です。

◆わたしたちプロテスタントには、「マリア崇拜」はありません。マリアを神の如く拝むというのとは違いますけれども、神の御告げを信じ、神の奇跡を信じ、神のとてつもない言葉を信じて、「お言葉通りこの身に成りますように」という、この従順な信仰は、キリスト者万人の信仰でなければならないのではないのでしょうか。ですからカトリックの信者さんたちが、「お言葉通りこの身に成りますように」との、「神様の恵みがわたしの体に満ち溢れますように」と祈りつつ、礼拝堂に入り、礼拝を捧げるのでないのでしょうか。私たちが方が浅薄なマリア理解をしていますね。マリアを退けている。マリアを退けることによって、わたしたちの内に神が生きて、どのような時にも共にいて、一つであってくださって、癒す時には癒す。しかしその苦しみに耐える時には耐えることができるように支えてくださる。「癒す」ということは、病気を治すことだけをいうわけではありません。「癒す」とは、病む人であれ、誰であれ、その人に神として「仕える」ことなのです。その姿勢が「癒す」ことなのです。わたしたちはもっとストレートにイエス様による神様による癒しを信じないといけないと思います。信じないから、神様、イエス様が遠くなってしまふ。わたしたちが神様、イエス様を退けておいて、レベルの低いあれこれの恵みを求める。普通、そういうのを「御利益宗教」と言うのですね。そういう点でわたしたちの信仰が本当に神に遣わされたみ使いが示し、マリアが信じているそのような信仰の日々になっているかどうか。

◆先日 23 日に、当教会で壮年部の修養会がありました。テーマは、「宣教の新たな展開」と「信仰の継承」の問題です。今、教会も少子高齢化の中で縮小している、あと何十年かしたら、計算上教会員はゼロになるとそんな悲観的な事も言われています。しかし、このマリアさんは10代後半の若い娘です。エリザベトは子を授かる年は過ぎたおばあさんです。そういう者が神を身ごもり、キリストの先駆者を身ごもるのです。ですから私たち1人、1人が産み落とせばいいのです。そしてどの一人一人も、かけがえがない存在である事を信じ、そういう姿勢で私自身が生きる事だと思います。

◆今日日曜学校で、「不思議な鐘」という紙芝居をしました。街に大きな教会があり、鐘楼があります。神様の御心に適う供え物が捧げられた時、クリスマスイブにこの鐘が鳴るといふ言い伝えです。ところがその街にその鐘の音を聞いた者が一人もおりません。田舎に住むペドロとアントニオ兄弟は、おじいさんからその話を聞いて、どうしてもその教会に行きたくて、「おじいちゃん言ってもいい？」と聞きますが、「もう少し大きくなってからね」と、許してもらえません。しかし二人は我慢で仕切れず出かけます。途中、雪道に一人のおばあさんが倒れていました。ペドロが介抱し、弟のアントニオが一人で教会に行き、僅かな献金を捧げた時、鐘が鳴り出したというお話です。ですから礼拝堂における礼拝と、倒れている人を介抱することが、一つになった時、神様がお喜びになるのです。「神様にできないことは何一つありません。」この御使いガブリエルの御言葉を、私達が信じて生きるならば、神様は御心に適う善きことを即刻なさって下さるに違いありません。

◆お祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

どうか不信仰な私たちを憐れみ、赦し、どうかあなたを信じるしもべたち、はしためたちとしてください。この祈りイエス様の御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。